

講演 ヴィニ作『軍隊の服従と偉大』再読
— 俘虜の問題 —

田中 隆二

原野先生から「研究発表会」の機会に私にも話をさせて頂けるという事を伺い、粗忽者ですので、てっきり「広島復帰」のご挨拶をさせて頂けるものと思ひ込んで、喜んでお願いすることにしてしまいました。ところが「講演」だそうで、全く困って居ります。「講演」と銘打ってお話できるような材料は何も持って居りません。そもそも浅学非才ですから、「講演」などは無理なことです。しかし、早くお断りすべきでしたのに、それもようしないまま今日に到ったので、今更プログラムに穴をあけて一層ご迷惑をかけるわけにも参りません。それで、勝手なことを申しまして誠に申し訳ございませんが、広島へ十八年振りに戻ってきたご挨拶の名刺代わりということに、やはりして頂きまして、要領の得ない拙い話ですがご勘弁頂きたいと存じます。

家のものに、私の話は前置きが長いといつも苦情を言われて居ります。今日のお話は、実は、全部が前置きのようなものです。従って、尻切れトンボになる恐れが大いにあります。それで、訳が分からなくなるまえに、これがお話したいのだということを、まず、申し上げて置きます。

一つは、とどのつまりはヴィニ作『軍隊の服従と偉大』を是非お読み頂きたいということになりましょうか。この小説はこの作家の発表したものの中では一番よく読まれていると考えられるのですが、それでも読んだ人の数は、我国では、そう多くはないでしょう。出版されたのは千八百三十五年ですが、百数十年後の今日、つまり現代でも、なお読まれるに値するというのが、「再読」とした本当の理由です。皆様は、少なくとも一読願わくば再読をお願いする次第です。「— 俘虜の問題 —」と副題しましたのは、これからお話することで分かって頂ければ幸いです、それを傍証し得ると思考したからです。

もう一つ申し上げたいこととして、「再読」の今一つの意味、つまり、ただ単にこの作品だけを読み返すということだけでなく、それが私のヴィニ研究再出版を自らに確言すると共に、学兄諸氏にもそれをお約束するということがあります。振り返って見ますに、私が松江で安閑とした日々をすごしてしまったこの十七年の間に、三木先生を初めとして、林先生、長崎先生と、こうした先生方の年齢とは逆の順序で、恩師が鬼籍に入られました。つい先日、私のフランスでの先生、フランソワ・ジェルマン先生の訃報に接しましたので、フランス文学の領域で叱正を頂ける私の恩師は今ほも

う中村義男先生ただお一人となってしまうました。昭和五十二年から今日まで十七年間ヴィニ研究を蔑ろにしてきた私の「広島復帰」は、言わば「蕩児の帰還」でありまして、ここで初心に帰らなければ、私は、「恩知らず」と非難されても、返す言葉もないわけです。

更にもう一つ付け加えてお話をすることを許して頂けるならば、誠実ということがどんな場合でも大切だということをお話させて頂きたいと存じます。国籍や言語が異なっても、「誠実さ」の重要であることには変わりはないと思われます。また、どの分野においてもこのことは否定できず、特に学問とか研究においては最も尊重されるべきことと私は考えます。いささか些事にわたるかとも思わないわけではありませんが、後に一例をご紹介してご批判を仰ぎたいと存じます。

ところで、このようなことを私が今回お話ししようと思うに到った経過を、つぎに、時間的順序を追ってお知らせいたします。

私は千九百七十五年四月末にフランス政府給費留学生としての留学を終えて以後十五年間はフランスを訪れることなく過ごしておりました。それが、梅謙次郎顕彰を機会に島根大学とリヨン第三大学が交流協定を急速締結することになり、その事後処理のため、千九百九十年十二月二十日頃から翌千九百九十一年一月半ばにかけて渡仏することとなりました。

この小旅行での収穫は、勿論、リヨン第三大学でヴィアル学長等と再会して、学生及び教員の交流を具体化したことです。しかし、それに留まらず、この機会に恩師ジェルマン先生、ディジョンの知人ベラン夫妻、ヴィニ協会会長ルフラン夫人夫妻などディジョン留学当時お世話になった方々との再会も果たせたことです。そして、この旧知の人々との再会は私のヴィニ研究再出発の契機の一つとなりました。また、このフランス訪問は、全く思いがけない体験を私共にさせてくれました。日本に帰る日の前々日だったと記憶しておりますが、私共はパリでイラクに対する開戦に反対するデモ隊に遭遇しました。私達はミシェル・ド・モンバルナスというホテルに泊まって居りました。その近くには安いミネラル・ウォーターを売っているスーパーが見つからなかったので、メトロ・サン=オーギュスタンの傍のプリ=ジュニクへ時々水を買って行っておりました。その日もその目的でメトロに乗ったのですが、そのプリ=ジュニクの辺りは騒然としていて、口々に何か叫びながら行進するデモ隊と、それを遠巻にしている警官隊との間であわや衝突でも起こりかねない様子でした。臆病な私達は、買い物もそこそこに、騒ぎに巻き込まれないように、匆々としてその場を立ち去りました。

その後帰国後日成らずして湾岸戦争が勃発しました。その戦争については皆様よくご承知の通りです。私としては、一番印象深かったのは、戦争捕虜の問題でした。この問題は、まずは少数ながらイラク側に捕えられた多国籍軍の兵士の姿がテレビで放映されたことによりクローズ・アップされました。一時この捕虜の問題は彼らの留

守宅の数々の悩みと共にテレビ、新聞等の報道を賑わしたものです。そして、戦争終結と同時に、彼らの殆ど全員が解放されることにより、一応の解決は見ました。しかし、その後明らかにされた、多国籍軍に捕われた夥しい数のイラク兵士の存在のため、この戦争で最も大きな問題の一つとして、この捕虜の問題は、今もなお、私の脳裏に焼き付いて居ります。けれども、何故かこれら双方の捕虜についての情報はその後の出版物には見当たらなくなっております。

それはさて置き、千九百九十三年四月、私は交換教授の為リヨン第三大学に派遣されることとなりました。その機会を利用して、私共はまたフランスの知人を歴訪しました。

ルフラン夫人夫妻をトルーヴィルの別荘に訪ねた時のことです。ルフラン氏が盛んに「レベ」という単語を口から発するのですが、恥ずかしながら私には最初は何のことも全く分かりませんでした。しかし、SNCFの抜き打ちストがあったため、思いがけない三泊四日という永逗留をすることとなり、話をよく聞くうちに、それはヴィニの叔父ジョゼフ=ピエール・ド・ヴィニが指揮していたフレガートの名前であることが分かりました。その「レベ号」はイギリス海軍の軍艦「レインボー号」により大破・拿捕され、艦長ヴィニ大佐以下生存者全員が捕虜となったのでした。資料等をご覧下されれば幸甚です。思い出してみると、ルフラン夫人はRHLFの千九百六十四年刊ヴィニ・ルナン記念特別号に、それまで知られていなかったこの不運なヴィニ大佐について彼女が発掘したことを発表し、その研究が認められて、後年ヴィニ協会の会長に就任されることとなったのでした。

ルフラン夫人はそれから更に十数年後ジョゼフ=ピエール・ド・ヴィニの子孫から新資料を提供されて、協会機関誌千九百八十二年一八十三年合併号に、その資料により判明したことを加えて第二の論文を発表、この件につき補完されていました。これも資料にあります。私は機関誌十二号の送付を受けながら、その論文に目を通すことを怠って居りました。この一事は、まさに、私が「蕩児」であったことを如実に示して居ります。私は夫人より十二号をもう一部頂戴し私の不勉強を漸く補った次第です。また、夫人のこの論文の冒頭で夫人が遺憾の意を表されていたジャン・ロスト氏の不誠実で恩知らずな仕打ちにつき、機会有る毎に語ることを、自分の罪滅ぼしのためもあって、夫人に約束いたしました。この講演がその最初の好機となった訳です。

トルーヴィルからリヨンへ帰る途中、私共はルワール河のお城巡りをしました。私はロシュの城とヴィニの銅像をふたたび見ることができました。絶版になっていて入手できないと危惧していたロスト氏の著書もお城の売店で購入することができました。RHLF掲載のルフラン夫人のジョゼフ=ピエール・ド・ヴィニについての第一論文、ヴィニ協会機関誌所載の第二論文、ジャン・ロスト氏著書はご覧の通り資料としてお渡ししたものの中に全部あります。ロスト氏がルフラン夫人より資料提供を受けてこの著書をもったことは明らかです。其にも拘らず、参考文献の中にルフラン夫人の労作

が見出されないのは誠に不可解です。また、ルフラン夫人指摘の通り、フランソワ・エノ氏による同書のプレファースに、ロスト氏がジョゼフ=ピエール・ド・ヴィニを発掘したようにかいてあるのは明らかに誤りです。しかも、ロスト氏の著書では、ジョゼフとあるべきところが全てジャンとなっております。ロスト氏がエノ氏の賛辞にある間違いを見逃したのか、それともエノ氏が誤りを承知の上でロスト氏にへつらったのかは知るよしもありません。どちらにしても、識者ならば、たちどころに見破られてしまうような不正を犯していることは確実で、この著作の汚点となっております。研究者に要求されることの最大のものに「誠実」があることに思いをいたす時、この事は他人事とは思われません。我々も肝に銘じるべきと反省する次第です。

この一事を除けば、ロスト氏のこの著述は裨益するところ大なるものがあると、私には思われます。特に、その中で、ジョゼフ=ピエール・ド・ヴィニが幽閉されていた部屋が特定されて居り、当該囚人が壁に刻みつけた文章などがこの本に収録されているのは有益です。そうしたことは、買ったことは買ったものの、この本を読む暇もなく城の見学をした私には全く残念なことに思われます。次にこの城を訪れる時は、私も是非そうしたものを確認したいと思って居ります。

さて、以上、ルフラン夫人の労作を紹介しながら明らかにした、ヴィニの叔父さんの中に、捕虜となった不幸な海軍士官がいた事実は、夫人同様、ヴィニの作品に何らかの影響をおよぼしていると、私にも思われます。しかし、同夫人が彼女の例の二つの論文で述べているように、ヴィニはジョゼフ=ピエールの名前やその存在そのものについても、これまで知られている資料の範囲では、何処にもとっていいぐらい、明確なことは殆ど何も残して居りません。まして、その叔父が捕虜であったとか、その事実が彼ヴィニにどんな思いをさせたかというようなことは一切記しておりません。けれども、これもルフラン夫人が再三指摘しているように、「レベ号」と同じく艦が破壊されマストの折れた船のイメージはヴィニの作品に繰り返して現れています。本日の話題である『軍隊の服従と偉大』の第三話「ルノー大尉の生と死 — 或いは藤の杖 —」には、「レベ号」拿捕の状況と酷似するフランスの軍艦捕獲の有り様が描写されて居ります。詳細は本書では是非ご確認下さい。それどころか、ルノー大尉（その時は中尉）はヴィニ大佐と同様イギリス海軍の捕虜となります。ルフラン夫人はこの戦争捕虜の問題には言及されておりません。ヴィニがこの叔父のことを語りたがっていなかったと想像されること、ヴィニが声高に唱えてきた「名誉」とこの「俘虜」の問題があまりにも背馳すると考えられること、なによりも、この事柄に関する全てがヴェールに包まれたままであること、そうしたことが、ルフラン夫人をして、敢えて「俘虜」の問題にまで立ち入ることを許さなかったと私には思われます。その代わり、ヴィニが繰り返して用いている「人生=牢獄」というテーマについては、ルフラン夫人は注目されていて、そのテーマとこの叔父の存在は大いに関係が有る旨重ねて述べて居られます。

私はルフラン夫人の意見に全面的に賛成するものです。ただ、『軍隊の服従と偉大』の第三話には、明らかに「俘虜」の問題が見出されるということを言って置きたいのです。そして、ヴィニがナポレオンをして「わしは捕虜は嫌いじゃ。死ぬべきだ。」と言わしめた、その奥には、叔父ジョゼフ=ピエールの受けた仕打ちについてなされた抗議と共に、より普遍的な問題としての「俘虜」についての彼の考えが読み取れるように思われるのです。これが私をして今日のお話に「再読」なる表題をつけさせた所以でもあります。もっとも、これを説得力あるものにするには、このことに関するヴィニ自身の言葉を探し出すという基本的な作業が必要です。それを欠いている現在の状況では、全てが仮説の域に留まっているのは否めません。ヴィニについては、ジャン・サンニエ氏所蔵の未発表資料がまだかなりあることはよく知られて居りました。最近また書簡集が三冊出版されましたので、それ等を含め、既刊の『詩人の日記』等も再調査して、ヴィニが叔父ジョゼフ=ピエールについてどれぐらい知っていたかを明らかにしようとは私は考えております。新資料の中に、この叔父とトロンシェで面識を得たと書いてあるものがみいだされるので、ヴィニがジョゼフ=ピエールを知っていたことは間違いないと思われます。また、ルフラン夫人も述べている通り、ヴィニの行なっていた親類との交際の実態をより明らかにすることができれば、この叔父についても新しい事実が分かってくると期待されます。

ところで、副題とした「俘虜の問題」についてですが、私は吹浦忠正氏の『捕虜の文明史』という本をたまたま購入して居りました。湾岸戦争が起こるちょっと前のことです。先に述べた通り、この戦争で私に強く印象づけられたのは「俘虜の問題」です。それから、湾岸戦争後に「レベ号」とジョゼフ=ピエール・ド・ヴィニの悲運を知りました。それで、吹浦氏の本のことを思い出したので、読んで見ました。この本は表題の通り、古今東西にわたり捕虜について知られていることをまとめたものです。捕虜は、誰でも一寸想像すれば分かるように、昔は殺されたり、奴隷にされたり、虐待されたものです。文明が進むにつれて捕虜の取り扱いにルールが作られ、人道に背かぬようになって来ました。そうは言っても、第二次世界大戦中は、この進歩と逆行する恐ろしいことが行なわれました。それはナチス・ドイツだけでなく日本の軍隊も行なったことです。また、元日本兵を抑留したソ連の行為も明らかに国際法違反と思われます。それはさて置き、日本についてだけ述べますと、この本によれば、捕虜についての考えは、日清・日露の二つの戦争の時よりも、ずっと悪くなっているようです。両大戦とも日本の勝利で終わっていますが、捕虜の扱いについては、概ね文明国の取り扱いとして、高く評価されるものであったようです。特に、日露戦争の時、ロシア兵は「まつやま」と言って投降して来たということも、この本に書いてあります。また、送られてくる捕虜は一等車で、それを迎える収容所側の市長が三等車だったとか、捕虜が夫人同伴で借家住まいができたとか、果ては遊郭登楼とあいなったというような信じがたいことまで書いてあります。

戦時中我々が吹き込まれていた「玉砕」は、明治以来文明国入りを早く果たそうと努力してきた我が国の開国精神とは、全く相反するものであるということも実証的に説明されています。明治の先覚者達(大山巖・森鷗外等)はこの点でも正しかったようです。

ヴィニの『軍隊の服従と偉大』は、既に述べております通り、千八百三十五年に出版された作品です。しかも、ここに収められている三つの挿話は、十八世紀末・フランス大革命時代に起こったことや、十九世紀初頭・ナポレオン戦役、千八百三十年・七月革命の際の内戦等について、ヴィニが聞いたこと或いは自らも体験したこと等に基いて、作られたものです。千八百六十三年に亡くなったヴィニは、勿論、普仏戦争も第一次世界大戦も太平洋戦争も知っている筈はありません。まして、湾岸戦争を予測しているところなどこの本には全くありません。そうした戦争の時に生ずる捕虜のことを先取りして、ヴィニがルノー中尉をイギリス海軍の捕虜に仕立てたとも想像されません。しかし、この第三話に出てくる捕虜の話は、叔父ジョゼフ=ピエールの不幸と何らかの繋がりがあるだけでなく、戦争に纏わる一つの重大な問題と関係があると私には感じられます。戦争そのものの方が、勿論、より重要です。戦争と軍人について語っているという点から、この作品はいつの時代でも読まれ且つ論じられるでしょうが、未解決の超時代的・宇宙的大問題である「戦争」とそれに付随して生じ、段階としてはより早く解決できるかも知れない「俘虜」の問題が見出されるということでも、この作品は、やはり、再読に値すると、私には思われます。皆様も一読或いは再読の上、ご意見お聞かせ願えれば幸いです。

終わりに、湾岸戦争の時に出了た「俘虜」について詳しく書いてある書物を私は探しておりますので、ご存知でしたらご教示をお願い致します。御静聴誠に有り難うございました。

資料一

Christiane LEFRANC, 《L'ombre d'une prison》, in Revue d'Histoire Littéraire de la France, 1964, pp.196-207.

Christiane LEFRANC, 《La Frégate, le Malheur, la Prison》, in Bulletin N°12 de l'Association des Amls de VIGNY, 1983, pp.19-46.

Jean RAUST, LOCHES au cours des siècles, Editions C. L. D., 1992, pp.117-143.

吹浦忠正, 『捕虜の文明史』, 新潮社, 1990.

Alfred de VIGNY, Servitude et Grandeur militaires, introduction, sommaire biographique, notes et relevé des variantes par François GERMAIN, Professeur à la Faculté des Lettres de Dijon, Garnier, 1965.

Alfred de VIGNY, Servitude et Grandeur militaires, Gallimard, 1992.

資料二

*俘虜の問題

Alfred de VIGNY の叔父 Joseph-Pierre de VIGNY (Capitaine de vaisseau, commandant de la Frégate (l'Hébé) の場合: 時: 1782年9月4日。 所: Saint-Malo から Brest の間。 L'Hébé は商船隊を護送中、敵英艦 Le Rainbow により大破・拿捕された。敵英艦の艦長は TROLLOPE、俘虜は Plymouth に連行された。*俘虜送還: 時: 1783年アメリカ独立戦争終結後。*軍法会議: 時: 1783年8月末から9月初旬。判決: 15年の禁錮。ただし、情状酌量により、6年の禁錮に軽減。Locbes城内の獄舎に繋がれた。*以上のことは、Revue d'Histoire Littéraire de la France, 1964年第二号 (4月~6月)に発表された Madame Christiane LEFRANC の論文 (L'ombre d'une prison)による。この時点では、同夫人も、このヴィニの叔父がその後どうなったかということまでは調査されていなかった。獄死したのではないかと想像されていたようである。*Jean RAUST: Locbes au cours des siècles の Préface に、[... Ce n'est pas le moindre mérite des recherches du Docteur Jean RAUST que d'avoir réussi entre autres, à identifier le mystérieux prisonnier du château, cet oncle de VIGNY, capitaine de vaisseau, cassé pour n'avoir pas su défendre son navire face aux Anglais.] Paris, le 26 octobre 1980. とあるのは間違いである。

*Joseph-Pierre de VIGNY についての後判明したこと: 1742年 Tronchet 城で誕生。14歳の時海軍に入隊。Titon号、Centaure号 (commandant = M. de Sabran) に搭乗。1758年、戦闘中負傷。1762年 Malicieuse号に搭乗、敵艦捕獲。1763年 Choiseul公爵により少尉に任命される。1773年、大尉に昇進。1782年、大佐に昇進。同年8月24日、レベ号にてプレスト行きを命ぜられる。1782年9月4日レベ号拿捕。Joseph-Pierre de VIGNYの事蹟、軍法会議のメンバーの氏名等今回詳細判明、但し、煩瑣になるので省略。最も意外な発見は、囚人が1785年秋から既に釈放されていたことである。彼は妻の姉(妹?)夫婦 M. et Mme de la Motte de Lesnaye の領地 Bonnefontaine に引き取られ、その後 Gravelle の家族のところに戻った。Vigny-Bécard 夫婦には一人娘があり、Hermine といった。彼女は 1782年4月8日、Saint-Malo で生まれた。彼女は、1800年に、Georges du Pré de Saint-Maur と結婚した。そして、七人の子供を生んだ。Du Pré de Saint-Maur 夫妻は Cher 県 Argent-sur-Sauldre に le Château d'Argent を持っていた。J.-P. de VIGNY は其処で 1812年に70歳で死亡した。*以上のことは Mme Christiane LEFRANC: 《La Frégate, le Malheur, la Prison》(Bulletin n° 12 de l'Association, 1982-1983) により判明した。*Jean RAUST の著作では Joseph-Pierre とあるべきところが全部 Jean-Pierre になっている。Mme LEFRANC については 139 ページに僅か一行述べられているに過ぎない。誠に遺憾である。

資料三

[... Il (L'Empereur) s'arrêta court devant moi, et parlant au colonel qui me présentait, au lieu de m'adresser directement la parole:

"Pourquoi ne l'ai-je vu nulle part? — encore lieutenant?"

— Il était prisonnier depuis 1804.

— Pourquoi ne s'est-il pas échappé?"

— J'étais sur parole, dis-je à demi-voix.

— Je n'aime pas les prisonniers, dit-il; on se fait tuer". — Il me tourna le dos.] VIGNY: Servitude et Grandeur militaires, Gallimard, 1992, pp. 219-220.

「敵国は古より極めて残忍の性を有せり。 戦鬪に際し若し誤て其生擒に遇はば、必ず酷虐にして死に勝るの苦痛を受け、遂には野蛮惨毒の所為を以て其身命を 賊せらるるは必然なり。 故に万一如何なる非常の難戦に係わるも、決して敵の生擒する所となる可からず。 寧ろ潔く一死を遂げ、以て日本男児の名譽を全うすべし。」山縣有朋 『申告』 *吹浦忠正『捕虜の文明史』、新潮社、1990年、112 ページ。

「生キテ虜囚ノ辱ヲ受ケズ、死シテ罪禍ノ汚名ヲ残スコト勿レ」 東条英機 『戦陣訓』 同上 112 ページ。

「傷ツキ戦ウコト能ハサル者 俘獲其兵器ヲ委ヌル者 并ニ自己ノ意ニ出テ帰降スル者ハ是ヲ殺戮シ是ヲ毀傷スルコトヲ得ス。俘虜ノ事ニ就テハ是ニ準スル条規六ツアリ。第一ニハ 俘虜ハ其階級ニ準ジ宜ヲ計リ生活ノ資ヲ給シ 苦病創痍アラハ是ニ看護医療ヲ加フヘシ。第二ニハ 俘虜ハ是ヲ幽閉シ要シテ力投ヲ為サ令ルコトヲ得ヘシ。第三ニハ 然トモ其士官ハ士ノ榮ヲ以テ敢テ 送セサルヲ誓フニ至リ是ヲ幽閉ス。其身ノ自在ニ進スヘシ。第四ニハ 俘虜ハ是ヲ要シテ軍役ニ就カ令ルコトヲ得ス。第五ニハ 俘虜ノ事故アルニ非サル者ハ 互ニ是ヲ換フ。此時徒卒ハ徒卒ヲ以テ階級アル者ハ其階級ニ準シテ是ヲ換ルコトヲ得ヘシ。又能ク是ヲ錢貨ニテ贖ヒ還スコトアリ(贖還)。第六ニハ 和睦ニ復スル時ハ 悉ク俘虜ヲ免スヲ以テ例トス。」 西周『万国公法』 同上 87 ~ 88 ページ。

① 階級に応じて給養をし (『ブラッセル宣言』25 条、『1949年の捕虜条約』16条) 必要な医療を与える (「ブ」宣言 35、「捕」条約 44) ② 隔離して管理し (24、22-25)、重労働を課さない (25、49)、③ 宣誓解放 (31、21)、④ 軍役の不可なること (26、50)、⑤ 等位等交換、身代金による解放、⑥ 和睦時の解放 同上 88 ページ。

*大山 巖については 103 ページ。*森 鷗外については 118 ~ 124 ページ。

Ryūji TANAKA

C'est après 15 ans d'absence que j'ai visité la France pour la troisième fois en 1990. Ma femme et moi, nous sommes allés à Lyon pour revoir Messieurs Vialle et Maxence, président et vice-président de l'Université Lyon III, afin de réaliser l'échange des professeurs et des étudiants de nos deux universités. J'étais à cette époque professeur à l'Université de Shimane. Vers le milieu du mois de janvier 1991, juste avant notre retour au Japon, nous avons vu à Paris une grande manifestation contre la guerre avec l'Iraq. La Guerre du Golfe a éclaté tout de suite après notre rentrée au Japon. Les problèmes de prisonniers de guerre m'ont beaucoup intéressé pendant toute celle-ci.

J'ai été envoyé comme professeur détaché à Lyon III en 1993. J'ai eu l'occasion de revoir Madame Lefranc, présidente de l'Association des Amis d'Alfred de Vigny. Grâce à Monsieur Lefranc, son mari, je me suis rappelé l'excellente étude de Madame Lefranc sur Joseph-Pierre de Vigny, un des oncles paternels de l'écrivain. Joseph-Pierre de Vigny, capitaine de vaisseau, était prisonnier de guerre. Madame Lefranc a publié sa première découverte en 1964. Elle imaginait à cette époque que Joseph-Pierre était mort en prison. Elle a pu obtenir de nouveaux documents sur ce personnage et a publié sa seconde découverte en 1983. Joseph-Pierre avait été libéré en 1785. Elle imagine que Vigny connaissait l'histoire de cet infortuné oncle et que les malheurs de ce capitaine et de sa frégate ont laissé quelques traces dans son oeuvre.

J'ai acheté par hasard un exemplaire du livre de Monsieur Jean Raust intitulé «Loches au cours des siècles », dans lequel j'ai trouvé l'histoire du même oncle de Vigny, mais sous un autre nom : Jean-Pierre au lieu de Joseph-Pierre. Ce qui me semble plus étrange, c'est que M. Raust ne fait aucune référence à la première découverte de Madame Lefranc dans la bibliographie de son livre. Je trouve la préface de Monsieur François Enaud très inexacte : il dit : "ce n'est pas le moindre mérite des recherches du Dr Jean Raust que d'avoir réussi à identifier le mystérieux prisonnier du château, cet oncle de Vigny cassé pour n'avoir pas su défendre son navire

face aux Anglais. »

Je pense moi-même que le malheur de cet oncle de Vigny a beaucoup influencé son oeuvre. Dans « Servitude et grandeur militaires », Renaud et son père, comme tout le monde le sait, sont tous les deux prisonniers de guerre. Ce qu'il nous faut, c'est trouver maintenant des preuves de la connaissance de l'écrivain sur son oncle. Quant aux problèmes généraux de prisonniers de guerre, ce roman de Vigny dirait quelque chose. Je trouve que Vigny est toujours un écrivain actuel sous un masque impassible et indifférent.